TADESKA 報告レジュメ
日時：2014 年 3 月 1 日（土）10:30 – 12:30
関西学院大学梅田キャンパス
テーマ：「「第 5 回関西スペイン語教師の集い」をふりかえって」
担当：柳田玲奈
参加者：9 名
内容：

・前月に開催された「第 5 回関西スペイン語教師の集い」の内容を、順を追って振り返りながら、各テーマについて担当者を中心に参加者全員で意見交換がされた。
・冒頭で担当者からの提案として、学習者のレベルを意識した上での議論がされることが望ましいと述べた。まずはスペイン語を専攻語として学んでいるのか副専攻語として学んでいるのか、さらには学習者集団のレベルはどの程度なのか、大きく分けて 4 分割程度が考えられ、今回の意見交換においてその都度意識されたように思う。
・はじめの「gustar 動詞の導入」については、まず前月の担当者から概要説明がされた上で担当者自身がさらに議論を深めたいとした点や、今回の担当者からもいくつか論点が提示され、それらについて参加者全員で意見交換がされた。
・「a + 人称」という言い方について。「人称」というとどうしても「主語」という印象を与えてしまったり、誤解を与えかねないため、長くなるが「前置詞格人称代名詞」とした方がよいだろうとする意見が出た。ただ、教科書によっては前置詞格人称代名詞と gustar 動詞の導入順序がほぼ同時であったり逆であったりする場合も見られ、学習者にはなかなか定着しにくい項目であることも改めて確認された。
・「意味上の主語」「文法上の主語」という呼び方について。「主語」というのはあくまでも文法上の用語であって、「意味上の主語」というものが存在すること自体に違和感をおぼえるという意見が複数挙がった。gustar という動詞そのものの意味・性質が日本語の「好きだ」という語のそれとは異なるため、日本語と同じ意識で gustar を捉えること自体に無理があり、「好かれる」「気に入る」「魅了する」などいくつか訳の提案はあったものの、間接目的格人称代名詞との兼ね合いもあり、全員が納得するには至らなかった。
・「私はコーヒーが好きだ」という日本語と Me gusta el café.というスペイン語は、語順を入れ替えたものだという教え方については、多くの参加者が異を唱えた。
・次に、「接続法の導入」について。前回の担当者のスライドを参照しながら、いくつかの点について意見交換がされた。
・接続法は「ある事柄を事実として述べるのではなく、話者の頭の中で考えられたことを主観的に述べる活用形」であるという導入について、Creo que…の後で接続法を使ってしまうなど誤用の原因にこそなれ、入門レベルの学習者には益のない説明である可能性が高いという意見が出た。専攻の学生や 2 年目の学習者たちには必要になってくる概念ではあるが、副専攻の学生や接続法の基本的な使用のみで学習を終える学習者たちには、

「係り結び」的に主節との組み合わせを練習させることで十分ではないかという意見に、多くの参加者が同意したようだった。

・節の分類に関する内容についても、どこまで解説すべきか、学習者のレベルによっては割愛してもいいのではないかという意見が担当者から出され、解説の仕方、用語提示の仕方などについていくらか意見交換がされた。

・テストでどのような問題を出すかという点に関しても改めて意見交換がされた。担当者は個人的に、活用形を暗記させることにあまり積極的ではなかったが、実際の運用を考えれば活用できるかどうかは大きな問題でもあり、そのあたりのバランスをどうすればいいか迷うこともあった。これは接続法に限ったことではなく、ひとつの問題に多くの要素を盛り込もうと欲張らず、何を問うのかしっかり考えた上で問題を作成するのが望ましいというアドバイスが改めて参考になった。

・次に、「映画を通したスペイン語の授業」について。授業で教材として映画を使用したことのある参加者からその要領や経験談を聞くことができた。セリフを聞き取らせること以外にも、状況をスペイン語で描写させるなど、担当者には思いつかなかった利用法があり、大変参考になった。担当者自身はこれまで、学習者に馴染みのあるアニメ映画（スペイン語吹き替え）で単語を聞き取ってスクリプトの穴埋めなどしかしたことがなかったが、スペイン語圏の実写映画を見せることで言葉だけではなく仕草や習慣なども紹介することができることなど、今後の授業に取り入れたい活動内容がいくつか提示された。

・挨拶の際に交わされるハグやキスなど、日本人には馴染みにくい習慣について、前回の発表者は授業内で学生たちにできるだけ抵抗なくやってもらえるよう練習をするとしていたが、今回、日本文化を背景に持つ日本人にそこまで授業で強制するのはよくないとする意見も出た。今回の担当者の意見としては、実際にそのような場に遭遇した時に大きく戸惑わないよう自分と異なる文化を知識として知っておく必要性は大いに認めるが、自身のアイデンティティを曲げさせてまでそこに適応させることまでは授業の役割でないと考える。

・最後に、「教室における説明の提示方法」について。ごく短時間しか本テーマについて意見を出し合うことはできなかったが、パワーポイントなどのプレゼンソフトは図表や画像を見せるのに大変有用であることが改めて確認された。

・また、OHC の有用性もいくらか紹介された。講読や作文の授業で、教員が画面上で紙面にポイントや訂正を書き込みながら解説することができるといった点で、事前準備に手間のかかるプレゼンソフトとは異なる実用性が提示された。

以上。